

西脇常記教授退休記念論集

東アジアの宗教と文化

編集 クリスティアン・ウイッテルン／石立善

『佛母經』小論

西脇常記

はじめに

小論で扱う『佛母經』は、歴代の佛典目録には見えない。しかし敦煌からは多くの寫本が発見されており、あの時期にこの地で流行したことが分かる。大正藏の第八十五卷にはそのうちスタイン二〇八四¹⁾の寫本が收められている。では、なぜ流布したものでありながら目録に記載がないのであろうか。

方廣鋁主編『藏外佛敎文獻』は大藏經典に未收の佛典の翻刻を載せるものであるが、『佛母經』はその第一輯²⁾に取り上げられている。また季羨林主編『敦煌學大辭典』³⁾には、一項目を割いてかなり詳しく解説されている。

それらの成果を踏まえながら、以下まず第一章で、『佛母經』のもととなる『摩訶摩耶經』と『佛母經』の構成の概要を述べ、『佛母經』が疑經(偽經)であることの證を「六大惡夢」に見る。次に第二章で、上記の翻刻の際に用いられなかった敦煌寫本のうちのロシア藏と、ベルリン・トルファン・コレクシヨンに見える寫本を紹介し、さらに第三章で、國立バイエルン圖書館所藏の『佛說小涅槃經』を紹介して、これが敦煌・トルファン出

土の『佛母經』に連なる寫本であることを明らかにする。續く第四章では中國國家圖書館所藏（舊の北京圖書館所藏）の元版『佛說小涅槃經』を移寫し、バイエルン圖書館所藏の寫本が明初のものであることを確認する。また結語においては、『佛母經』がどのような形で傳承されてきたかを考えてみたい。それによって『佛母經』が佛典目録に記載されなかった事情もおのずから明らかになると考える。

第一章 『佛母經』について

『佛母經』は、『大般涅槃摩耶夫人品經』『大般涅槃經佛母品』『大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經』といった多様な名で呼ばれている。内容はいずれも同じで、一つの寫本の首題と尾題で名前が變わることも珍しくない。例えばペリオ二〇五五の首題は『大般涅槃摩耶夫人品經』で尾題は『佛母經』である。同じ寫本に分類されると考えられるものの中でも、例えば北京圖書館藏「歲」十一の首題は『大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經』、スタンレー一三七一は『佛母經』、そして前者の尾題は『大般涅槃經佛母品』、後者の尾題は『佛母經一卷』といった具合である。

季羨林主編『敦煌學大辭典』の「佛母經」の項の解説⁽⁴⁾は、この佛典が疑經であることを明示した上で、『摩訶摩耶經』卷下「佛臨涅槃母子相見」に題材を取り、そこに中國の孝道と佛教の無常思想を織り込んだもの」と説明している。そこでまず『摩訶摩耶經』について簡単に述べておこう。

『摩訶摩耶經』は、南齊時代（四七九〜五〇二）の曇景によって翻譯された。『佛昇忉利天爲母說法經』『摩耶經』『佛臨般涅槃母子相見經』とも呼ばれ、『佛母經』と同じようにいろいろな呼稱がある。それは、この佛典の中で阿難が佛陀にこの經をどのように名づけるべきかと質問し、佛陀がいくつもの名を挙げたことに基づいている。

佛陀の父、淨飯王は隣國の拘利 (Koliya) 族、天臂 (devadaha) 城主善覺 (suprabuddha) の二女を娶った。摩耶と摩訶波闍波提 (あるいは摩賀摩耶ともいう) である。摩耶は、六牙の白象が自分のうちに降りてくるのを夢に見て受胎した。その受胎と生誕が清淨無垢なものであるべきとの配慮によって、釋迦は摩耶の右脇から誕生している。生誕の七日後に摩耶は亡くなり、忉利天の下に生まれかわった。この經は、佛が忉利天に昇つて生母摩耶夫人のために説法し、般涅槃に臨んでは摩耶夫人が忉利天から下つて佛と最後の別れをしたことを記すものである。

もう少し經典にそつて詳しく見てみると、一般の佛典のように、この經も (イ) 通序 (如是我聞)、(ロ) 別序 (佛昇忉利天安居)、(ハ) 正宗分、(ニ) 流通分に分かれる。正宗分の第一段までが卷上である。

第一段の忉利説法は、「母子會見」〈文殊師利童子が佛の命を承けて摩耶の下に到ると、摩耶の兩乳より乳汁が奔出して佛の口に入る〉、「摩耶説法」〈佛は忉利天で摩耶をはじめ諸仙・諸天に説法する。すなわち集苦の本はすべて心意から生まれるものであり、解脱を得る以外に安穩の道はないとして、あらゆる欲望から離れることを勧める〉、「佛欲降地」〈鳩摩羅をして閻浮提に佛の下ることを告げしめ、天帝釋 (帝釋天) はそのために鬼神を使つて三道寶階を作る〉、「訣別説法」〈佛は母恩に報ぜんとして神呪を説き、諸天に持呪者を守らせる〉、「閻浮迎佛」〈佛は忉利天より閻浮提に下り、祇桓精舎の師子座につく。舍衛國王の波斯匿王等一切諸人は佛を迎えて喜び限りなく、そこで佛は十二因縁の説法を行う〉から成る。これ以下は卷下である。

第二段の巡遊入滅は「尼連沐浴」〈阿難は、提婆達多の三逆罪を嘆くが、佛はなおも提婆達多に慈悲のこころをかける。提婆達多は優婆羅比丘尼を打ち殺して現身が地獄に墮ちたことを記す〉、「涅槃預告」〈佛は諸地を巡遊して後に阿難に三月後に入滅すべきことを告げ埋葬法を教える〉、「樹間入滅」〈佛は雙樹間に臥し、異見を懷いていた百二十歳の梵志の須跋陀羅を度し終わり入定寂滅する。その後に葬儀埋葬の準備が始まる〉から成る。

第三段の母子訣別（この部分はこの経独自の構想）は、「摩耶感凶」（摩耶夫人は五衰を感じ五惡夢を見て佛の入滅を知る）、「摩耶降下」（尊者の阿那律（アニルツダ）は忉利天上の摩耶に佛の入滅を告げる。摩耶は悲しみに堪えず、雙樹間に下り、佛に禮拜しようとする）、「佛見摩耶」（佛はいったん命絶えたが、摩耶が降下したために大神通力で棺を開き放光合掌して起きあがる。母子再見し、母のために説傷する）から成る。

第四段は、「法滅懸記」（滅後千五百歳、遺法龍宮に隠没するに至るまでの法住法滅の状を懸記す。佛陀から聞いた阿難が摩耶夫人に語る形をとる）について述べる。

この後に流通分が續くが、宋本のみ巻末に「八國分舍利品第二」が加わる（敦煌寫本にもない）。ただし『大般涅槃經後分』中より抄出付記したものと考えられている。

以上から判るように、この經には特別の主張があるわけではない。小乘涅槃經（『長阿含經』遊行經）には、すでに佛の入滅に際して佛母が忉利天から下り偈讚訣別したとの記事がある。これに成道十二年に外道の迫害を避けて忉利天に昇り安居する話を加えて、佛と佛母である摩耶夫人間の母子の情愛を描いたものと言えよう。資料の上からみれば、前半は佛昇忉利天爲母說法經、後半は小乘涅槃經および法滅盡經類を材料としている。

さて小論で考察する『佛母經』では、その寫本が方廣鋤・李際寧によつて四種類に分類されているが、題材、構成そして内容はいずれもほとんど變わらず、以下のようである。

佛は涅槃に入るが、その時に忉利天にいる摩耶夫人の下に優波離を派遣して、間もなく涅槃に入るから閻浮提に降りてくるようにと告げさせる。その前に凶兆と思われる六惡夢を見ていた摩耶夫人は、優波離の話を聞いて驚きのあまり氣を失うが、やがて雙樹間に降りて行く。その時すでに涅槃に入り金棺銀槨に納められていた佛は、母の悲しみの声を聞いて神通力で金棺銀槨を開ける。そして母のために説法する。聞き了つて摩耶夫人が忉利天に歸ろうとすると、天地は震動し涙は雨のごとく下り鳥は悲しみの声をあげ、佛が涅槃に入ったことの沈痛が世

界を覆う。

『佛母經』は、敦煌寫本として二十六本残っていることが知られている。李際寧はそのうちの十六本を用いて翻刻する際に、四種類に分類している。それを示すと以下のようになる。

〔一、大般涅槃經摩耶夫人品經〕 P 二〇五が底本。校本は無し。

〔二、大般涅槃經佛母品〕 北京藏「月」四三（六六二八）が底本。校本は無し。

〔三、大般涅槃經佛母品〕 P 三九一九が底本。北京藏「官」九七（六六二四）、北京藏「羽」十五（六六二六）、北京藏「文」九九（六六二七）、北京藏「霜」八二（六六二五）の四本が校本。

〔四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經〕北京藏「歲」十一（六六二九）が底本。北京藏「鳥」九〇（六六三〇）、S 一三七一、S 五六七七、S 三三〇六、S 二〇八四、P 四六五四 + P 四五七六、P 四七九九の七本が校本。

これに關連して、ここではこの佛典が疑經であることについて述べておこう。

『佛母經』は、先に述べたように『摩訶摩耶經』に題材を取り、佛の母、摩耶夫人に対する孝道を織り込んだ點で、疑經であることが明らかである。それは具體的な記述からも確認できる。『摩訶摩耶經』卷下に見える摩耶夫人が釋迦の入滅前に不吉な夢として見る所謂「五大惡夢」に關わる部分である。ここでは次のように記される。

『摩訶摩耶經』卷下 (T12, 1012a19-27)

一夢、須彌山崩、四海水竭。

二夢、有諸羅刹、手執利刀、競挑一切衆生之眼。時有黑風吹、諸羅刹皆悉奔馳、歸於雪山。

三夢、欲色界諸天、忽失寶冠、自絕瓔珞、不安本座、身無光明、猶如聚墨。

四夢、如意珠玉、在高幢上、恒雨珍寶、周給一切。有四毒龍、口中吐火、吹倒彼幢、

吸如意珠。猛疾惡風、吹沒深淵。

五夢、有五師子、從空來下、嚙摩訶摩耶乳、入於左脇。身心疼痛、如被刀劍。

この「五大惡夢」は、『佛母經』では、「六種不祥之夢」「一、二、三」あるいは「六種惡夢」「四」として、以下の様に繼承されている。上述の四分類でのそれを整理すると次のようになる。

〔一、大般涅槃經摩耶夫人品經〕

一者夢見猛火來燒我心。

二者夢見兩乳自然流出。

三者夢見須彌山崩。

四者夢見大海枯竭。

五者夢見磨竭大魚、吞啖衆生。

六者夢見夜叉羅刹吸人精氣。

〔二、大般涅槃經佛母品〕

一者夢見須彌山崩、四大海水枯竭。

二者夢見獅子來咬我身、兩乳自然流出。

三者夢見猛火來燒我身。

四者夢見寶幢摧折、幡華崩倒。

五者夢見磨竭大魚、吞啖衆生。又見夜叉・羅刹吸人精氣。

六者夢見衆生如蜂失王、惆悵漫走。

〔三、大般涅槃經佛母品〕

一者夢見猛火來燒我身。

二者夢見兩乳自然流出。

三者夢見須彌山崩。

四者夢見大海枯竭。

五者夢見磨竭大魚、吞噉衆生。

六者夢見夜叉・羅刹吸人精氣。

〔四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經〕

一者夢見須彌山崩。

二者夢見四海枯竭。

三者夢見五月下霜。

四者夢見寶幢摧折、幡花崩倒。

五者夢見四火來燒我身。

六者夢見兩乳无故、自然流出。

これを見ると、例えば「兩乳自然流出」だけではそれがなぜ悪夢なのか分からないが、『摩訶摩耶經』五夢の「有五師子從空來下、嚙摩訶摩耶乳、入於左脇。心身疼痛、如被刀劍」に基づいていると考えれば、明らかに。ほかの悪夢もほとんどが「五種悪夢」の枠内のものである。疑經は、幅広い思想・文化の産物であるゆえに、一口で定義することは難しいが、この『佛母經』が中國文化の土壌で誕生したことは、「五種悪夢」の枠内にはない一つの注視すべき記述によって決定づけられる。それは「四」に見える「三者夢見五月下霜」である。

「五月下霜」は「五月降霜」とも作られ、戦國末の陰陽五行家の鄒衍(紀元前三〇五〜二四〇)の故事からきている。

その故事とは「鄒衍は燕の恵王に事え忠を盡すも、左右、之を譖す。王、之を繋ぐ。天を仰いで哭すれば、夏五月、之が爲に霜を下す」⁽⁵⁾である。これは冤獄の兆しとして中國文化圏ではひろく受け入れられてきたもので、例えば李白は「燕臣 昔し慟哭し、五月 秋霜を飛ばす」⁽⁶⁾と歌っている。様々な疑經が作られた際に中國思想の中でも陰陽五行思想の果たした役割が大きいことは、廣く注目されている。それにしてもその思想の開祖の故事が利用されているのは面白い事實であろう。

第二章 ロシア藏敦煌寫本とトルファン寫本の『佛母經』

『佛母經』の寫本のいくつかは、比較的まとまって目に觸れやすい形になっているが、中には見落とされがちなものもある。本章では、敦煌寫本とトルファンの寫本のうちから、そうしたものの五種を移寫しておく。

まず、方廣鎔主編『藏外佛教文獻』の翻刻の時点では利用できなかったと思われる、ロシア藏『佛母經』の四つについて紹介しておこう。なお以下、大きさ等の形態は孟列夫主編、西北師範大學敦煌學研究所袁席箴、陳華平翻譯『俄藏敦煌漢文寫卷鈔録』上・下巻⁽⁷⁾による。なおそこに用いられている記號は、「Φ」が「Футр」の第一字母で、一九三〇年代にフルク (K.K. Фурт, Konstantin-Konstantinovich Flye) コンスタンチン・コンスタンチノヴィチ フルク、一八九三〜一九四二)が整理したものを示す。これは一から三二五まである。「Дх」は「Дундхуан」(Dun'khyan) ドウンフアン 敦煌)からの二文字である。一から一一〇五〇の番號がつくが、敦煌でないものは五七五を數え、番號のみのものも含む。

尾題は「佛母經一卷」、二紙から成り、大きさは高二十二cm×幅五十六cm。三十一行、毎行十六〜二十一文字、罫線アリ。分類「四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人説傷品經」に屬し、その校本の一つペリオ四七九九に近い。

諸大衆吾

今背痛。欲般涅槃。不見阿難及吾迦葉。來時語言、

吾与汝不相見也。即使優婆離往藝忉利天上、

告吾母知。舉身疼痛、不可思議。願母早來、礼敬

三寶。尔時佛母於其中夜作六種惡夢。一者夢見

須彌山崩、二者夢見四海枯竭、三者夢見五月降

霜。四者夢見寶幢權折幡花崩倒、五者夢

見大火來燒我身、六者夢見兩乳自然流出。

尔時佛母說夢未訖、正見優波離從空中而來。

借問聖人從何方而來尔劇、形容顛顛、面色无

光、状似怯人、尔時優波離哽咽聲嘶、量久不語、告言佛母、佛母、我如

來大師昨夜子時捨大法身、入般涅槃故遣我

來告諸眷屬。尔時佛母聞是語已、渾髓自撲⁽⁸⁾

状似五須弥山崩、遍體血見、如波羅奢華、悶

絕躡地。有二天女將水噉之、量久還蘇。尔時

佛母將諸徒衆、恭敬圍繞、從忉利天下直至波羅

雙樹間。正見如来殞斂已訖、唯有僧伽梨衣

疊在棺邊。鉢盂錫杖掛其樹上。余時佛母

手携此物、而作是言。此是我子生存在日、持⁽⁹⁾

用此物、今无主也。十大弟子向天號哭、有二師

子自縊而死。余時佛母遶棺三匝、却住一面、拭淚⁽¹⁰⁾

而言、告言、慈子慈子、汝是我子、我是汝母。汝今

入般涅槃、云何不留半偈之法。余時世尊聞母喚

聲、金棺自開、却坐千葉蓮華臺上、為母說法、世

間苦空、諸行无常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂、

余時佛母聞是妙法、心生歡喜、還歸本天、未至天所、

佇立虛空、心生慈悲、嗚呼大哭。天地震動、淚下如雨。

雲中百鳥、皆作哭聲、一切江河、會有枯竭、一切叢林、會

(有)權折、一切恩愛、會有離別、何⁽¹¹⁾

期如来入般涅槃

佛母經一卷⁽¹²⁾

二、Dx ○二二六七

尾題は「佛母經一卷」、一紙から成り、大きさは高十九cm×幅三十九・五cm。二十三行、天界は二・五cmで、全體に下端の部分が缺けている。「三、大般涅槃經佛母品」の校本の一つ北京藏「羽」十五(六六二六)に近いが、

それとも多少の異同がある。

殞斂已訖、香木万束、擬欲焚身、

將纏遶。十大弟子、悲號震天、四果⁽¹³⁾

地、乃至聲聞、緣覺之類、金剛師子

體崩傷、六情酸楚、身毛皆豎、唯見

杖掛於林間、僧迦離衣、疊

手持此物、作如是言。我子

教化、利益人天、今既入般涅槃

即散髮搥膺、遶棺三迴、喚⁽¹⁴⁾

我子、我是汝母。昔在王宮、始生七

姨母波闍長養、年始七歲、踰城⁽¹⁵⁾

道、覆護衆生、今既入般涅槃、云

章句。悉達悉達。

尔時如来、金棺銀槨、壑然自開。

然而下。勇在空中、高七多羅樹間

現紫摩黄金色身、為母說法。⁽¹⁶⁾

母。一切諸山、會有崩倒、一切江河、會

叢林、會有權折、一切恩愛、會有

已便復沒矣。

尔時摩耶夫人聞其此語、心開意

勅求哀懺悔。不轉女身、證得何⁽¹⁷⁾

天衆、未到本宮、心生慈悲、住立虛

日、母子分離、永不相見、去也、大師

佛母經一卷⁽¹⁸⁾

三、 $24 \times 210 \times 47$ (〇二一〇一)

尾題は「佛母經一卷」、大きさは高二五・五cm×幅三十五cm。天界は二・五cm、地界は二cm。十六行、毎行十六字。經句は、「二、大般涅槃經佛母品」、「三、大般涅槃經佛母品」、「四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經」とおむね重なるが、組み立てが違う。上記四分類とは異なる系列の寫本である。

年七歳、逾城出家、三十成

今已入般涅槃、云何不留半偈

悉達、尔時如来聞母喚聲□

□然自開、妙兜羅錦、颯然而

七多羅樹、現紫磨黄金色身、却

上、為母說法、世間空虛、

无常、是生滅法、生滅滅□、寂

□復没矣。

是妙法、心開

將諸天衆、前後

住在空中、心生慈

動、淚下如雨、雲中百鳥、作哭聲、

會有枯竭、一切叢林、會有摧折、一

切恩愛、會有離別、何其如來入般涅槃、永

不相見。去也、大師。

佛母經一卷

四 凡○○○一〇

首題は「大般涅槃經佛母品□」、大きさは高二十六cm×幅三十九・五cm。二十三行、毎行十七字。この寫本は、「三、大般涅槃經佛母品」に近いが、それに用いた底本ペリオ三九一九、そして校本の北京藏「官」九七（六六二四）等四篇とは細部において異同がある。

大般涅槃經佛母品□

余時如來在俱尸那城跋提河側、二月十五日¹⁹

臨般涅槃、倚卧雙林。告諸大衆、吾今背痛、
欲般涅槃、迦葉來時、□吾與汝不相見、去也。

一切經書、付囑阿難、戒律文章、悉付迦葉、次
復告言、優波離、汝往昇天、報吾母知。道吾背
痛、不久涅槃。願母慈悲、降下閻浮、敬禮三寶。

爾時優波離受佛教勅、擲鉢騰空、須臾之間、
即至忉利天上。正見□耶夫人在歡喜園□、

種種莊嚴、受諸快樂。爾時□耶夫人、忽於□

夜作六種不祥之夢。一者夢見猛火來燒我

身。二者夢見兩乳自然流出。三者夢見須弥

山崩。四者夢見大海枯竭、五者夢見摩竭大

魚吞噉衆生。六者夢見夜叉羅刹吸人精氣。

作此夢已、憂愁不樂。須臾之間、即見告人優

波離形容顛顛、面無精光、狀似怯人、復無威德、

爾時摩耶夫人問言、優波離、汝從閻浮提來、

知我悉達平安已不。爾時優波離含悲報言、佛⁽²⁰⁾

母、爾時如來昨夜子時捨大法身、入般涅槃、

故遣我來告諸眷屬。爾時摩耶夫人聞其此

語、搥膺懊惱、悶絕擗地、如大山崩、有一天女、⁽²¹⁾

名曰芬葩、將冷水灑面、良久乃蘇。將諸天綵⁽²²⁾
女、頓身而下、鬢鬣雲飛。直至婆羅林間。正見如

次にトルファンの『佛母經』寫本について。ドイツ中央アジア學術探検隊の將來した漢語佛典の目録は、今日まで二冊出版されているが、そこには下に移寫する一篇が掲載されている。Ch 二一六六 (T II T2062) を帯びる斷片である。これは、一九〇四年十一月から一九〇五年十一月にかけての第二回學術調査隊によってトヨクで得られたものである。

五. Ch 二一六六 (T II T2062)

斷片の大きさは、高十二cm × 幅二十七・二cmで、十六行残っている。天の境界線は残り、字體は九、十世紀のものである。

『漢語佛典斷片目録』⁽²³⁾では、「大正藏 (T85) に收めるスタイン二〇八四と比較して、この斷片は異なるバージョン斷片である」と注記している。

痛、不

余時優波離受佛

問、即至忉利天上。

園中種種莊嚴受

種不祥之夢。一者

夢見兩乳自然流出。

四者夢見大海自然

吞噉衆生。六者夢見

已、愁憂不樂。

離形容憔悴、面

尒時優波離告

提來。尒時摩耶夫人、

着來、我共汝語。我昨

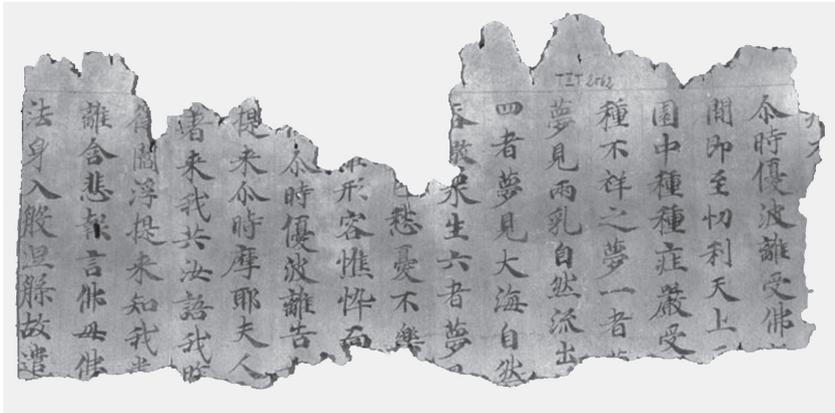
從閻浮提來、知我悉

離含悲報言、佛母佛

法身、入般涅槃。故遣

首尾ともに缺けているので、断定はできないが、この断片は先に見たロシア藏の四、五〇〇〇一〇「大般涅槃經佛母品□」と同じ系統の寫本であると言えよう。ただ七行目の「大海自然」はロシア藏では「大海枯竭」に作る。他の『佛母經』寫本はすべて「大海枯竭」に作るので、これを上の「兩乳自然流出」に引きずられての誤寫と考えると、兩者の六夢は全く一致する。

上で取り上げたロシア藏がすべて敦煌からのものであるとす



Ch 2166 (T II T2062)

ると、⁽²⁴⁾『佛母經』においても、敦煌とトルファンの地域差を窺わせるテキストの異同はなかったと確認できることになる。筆者は、『佛母經』と同じように、やはり今は『大正藏』卷八十五、古逸部・疑似部に收められている『新菩薩經』について、ベルリン・トルファン・コレクションの寫本を紹介したことがあるが、そこで認められるテキストのバリエーションも敦煌とトルファンの地域差からくるものではなかった。⁽²⁵⁾

第三章 国立バイエルン図書館所藏の『佛説小涅槃經』(Cod.sin.59)

ヘルベルト・フランケ教授(Prof. Herbert Franke)は、戦後のドイツ中國學の復興に尽力し、大御所として長く活躍されている。一昨年十月には、ミュンヘン大學東アジア研究所主催で教授の九十歳を祝う講演會が開かれた。三〇年前、フランケ教授は「明代初期のいくつかの印刷本と寫本について」⁽²⁶⁾という論文を發表し、その中で十一の作品を紹介した。その一つが、ここに取り上げる寫本『佛説小涅槃經』(Cod.sin.59)である。佛典目錄に『佛説小涅槃經』の名は見えないので、フランケはそのタイトルから『涅槃經』を簡略化したものと推測した上で、今に傳わる大藏經からそれに該當する經典として『佛垂般涅槃略説教誡經』と『佛臨涅槃記法住經』の二例を挙げた。ただし中身を検討するとそれらとは合わないもので、この佛典は同定できないとしている。

この寫本は、十一半葉(半折。あるいは面)の折本形式である。首題は『佛説小涅槃經』として残る。二つの紙の継ぎ目があり、長さは百十cm、高さは二十・八cm。罫線はない。一葉は四行。一行は九から十三字であり、墨點が施されている。また一字の大きさは約一・七×一・七cmである。いま移寫してみると以下の様になる。なお、□で囲んだ文字は筆者が補ったものである。

佛說小涅槃經

爾時如來。倚臥雙林。告諸大眾。

吾今皆背瞞。欲入涅槃。迦葉

來時。道吾與汝不相見

去也。一切經書。付囑阿難。戒律

文章。悉皆付與。迦葉上座。爾

時如來。告弟子。優波離。汝往

升天。報母令知。爾時摩耶夫

人。在忉利天^上。受諸快樂。忽於

昨夜子時。得六種惡夢。一者夢

見。有大猛火。燒我心肝。兩乳流

出。二者夢見。須彌山崩。三者

夢見。海水枯竭。四者夢見。罽

竭大魚。吞噉衆生。五者夢見。

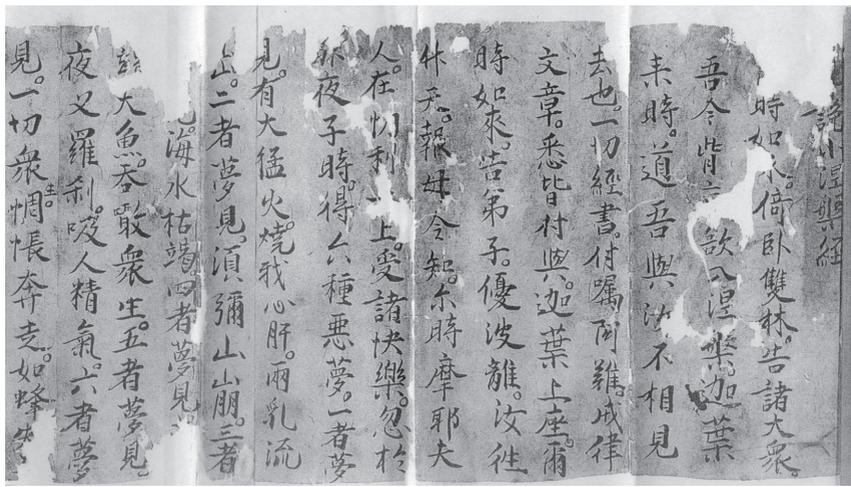
夜叉羅刹。吸人精氣。六者夢

見。一切衆生。惆悵奔走。如蜂失^王。

說夢未訖。乃見報人。優波離

。從空而來。爾時摩耶夫人。問言。

尊者尊者。因何形容憔悴。面



國立バイエルン圖書館所藏の『佛說小涅槃經』(Cod.sin.59)

無精光。唇口乾燥。全無威德。不比尋常。爾時優波離。哽咽報言。佛母佛母。三界大師。忽於昨夜子時。入般涅槃。金棺銀槨。殯斂已訖。故遣弟子。報母令知。爾時摩耶夫人。聞說此語。悶絕躡地。猶如死人。諸天彩女。冷水洒面。良久乃甦。即將徒衆。變鬘雲飛。至雙林所。唯見大衣。僧伽梨。疊在棺邊。鉢盂錫杖。空掛樹上。爾時摩耶夫人。作是念言。我子在時。持用此物。教化衆生。今者此物。並皆無用去也。爾時摩耶夫人。披頭散髮。搥膺大叫。遶棺三匝。喚言。如來如來。吾是汝母。汝是吾子。今既捨吾。入般涅槃。因何不與母說。四句偈言。爾時如來。在金棺中。聞母喚聲。從棺踊出。却坐般若臺。

說夢未訖。乃見報人。優波離
從空而未。爾時摩耶夫人。問言。
尊者尊者。因何形容憔悴。面
無精光。唇口乾燥。全無威德。不
比尋常。爾時優波離。哽咽報
言。佛母佛母。三界大師。忽於昨
夜子時。入般涅槃。金棺銀槨。
殯斂已訖。故遣弟子。報母令
知。爾時摩耶夫人。聞說此語。悶
絕躡地。猶如死人。諸天彩女。冷
水洒面。良久乃甦。即將徒衆。變
鬘雲飛。至雙林所。唯見大衣。僧
伽梨。疊在棺邊。鉢盂錫杖。
掛封上。爾時摩耶夫人。作是念

中。去地高七多羅樹。手執優鉢

羅華。為母說法。一切恩愛。皆有

離別。一切山岩。皆有崩穴。一切樹

木。皆有摧折。一切江河。皆有枯竭。

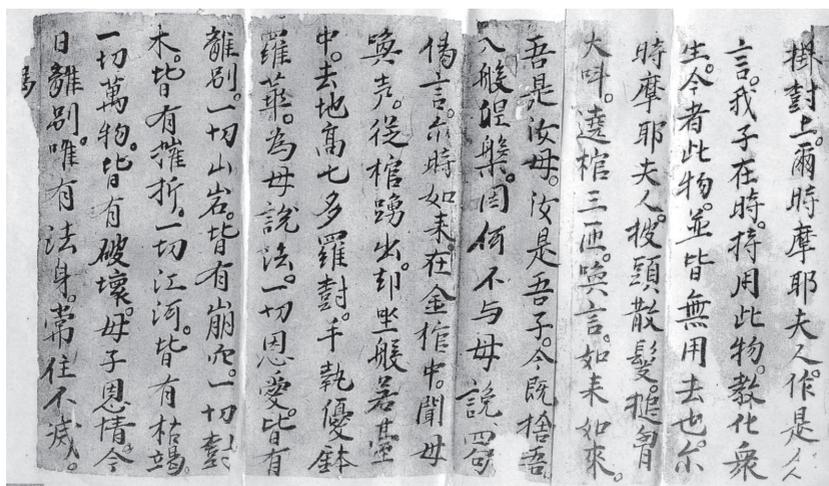
一切萬物。皆有破壞。母子恩情。今

日離別。唯有法身。常住不滅。

圖

これを見ると、上章で見た所謂『佛母經』の異本であることが分かる。しかし上の四分類（あるいはロシア藏三、四〇二〇四七も含めて五系統）のいずれにも微妙なところで合わない寫本である。この点についていまま少し詳しく述べると、『佛說小涅槃經』の冒頭部分から「六種惡夢」までは「三、大般涅槃經佛母品」とほとんど變わらない。即ち、いくつかの敘述、例えば最初の部分、「爾時如來。倚臥雙林。告諸大衆。吾今皆背痛。欲入涅槃」は「爾時如來。在拘尸那城提提河側。二月十五日臨般涅槃。倚臥雙林。告諸大衆。吾今皆背痛。欲般涅槃」となっているが、構成そのものは變わらない。

「六種惡夢」については、上で整理したものと異なる惡夢は



登場しないが、分類においてぴったり同じものはない。比較的近いのは「二、大般涅槃經佛母品」であろうが、その後の敘述構成ではやはり四つとは少しずつ異なる。もともと、この寫本が『佛母經』の一つのバージョンであることは疑いない。

フランケはなぜ紀年の見えないこの寫本を明代初期、十五世紀のものとしたのであろうか。彼の紹介した十一本の印刷本と寫本はいま國立バイエルン圖書館に所藏されているが、フランケは論文の最初の部分で、その來歴に觸れている。それによれば、これらは論文執筆の數年前に、ヴェルナー・ブルガー氏から保管し公開するように託されたもので、ハンブルクの美術商の所有する木造佛像の胎内から得られたという。その出現は全くの偶然で、一九六二年のエルベ川の洪水で、美術商の地下に置いてあった木造佛像が解體して發見されたのであった。十一本のテキストのいくつかには紀年があり、それが明代の初期であるゆえにフランケは件の『佛說小涅槃經』も同じ時代の産物と考えたのである。その十一本の作品は以下のものである。

印刷佛典：『妙法蓮華經』—永樂十八年（一四二〇）の序

『佛頂心大陀羅尼經』—北京、正統六年（一四四二）六月一日の奥付

『佛頂心大陀羅尼經』—北京、正統五年（一四四〇）四月八日の奥付

『觀世音菩薩救諸難呪』

『木一山嚴耐酢集』

一枚の大型彩色阿彌陀佛木版畫

寫本佛典：『佛頂尊勝總持經呪』—永樂十年（一四一二）五月六日の永樂帝の序文

景泰四年（一四五三）七月二十七日の奥書

『佛說小涅槃經』

『御註心經解』—洪武十一年（二三七八）出版

印刷道教經典：『太上三元賜福赦罪解厄延生經誥』—南京、景泰一年（一四五〇）出版

『太上玄靈斗母元君本命延生心經』—正統四年（一四三九）出版

佛像胎内に佛教關係と道教關係が併せて納められていたことは、明代の佛教が道教、さらには儒教と融合・調和したものとして存在したことを示している。これらの諸本はおそらく、佛像寄進者あるいはその肉親が日々身の回りに置き、用いたものであろう。『妙法蓮華經』と『御註心經解』を除く佛教關係のものはみな小作品で、『佛說小涅槃經』と同様、現在の大藏經にはそのままの形のものはない。従つて、それらは民衆用に佛典からアレンジして作られたものであろうと考えられる。

なお فرانケ は、木造佛像の胎内から出てきたものについては述べるが、佛像そのものには言及していない。佛像制作時代が確認できれば、胎内藏經の時代もある程度絞れることは言うまでもないが、この場合残念ながらその道は閉ざされている。

第四章 中國國家圖書館所藏の『佛說小涅槃經』

前章では、明初の寫本と考えられるテキストが『佛說小涅槃經』であり、敦煌やトルファンで數多く發見された『佛母經』の一バージョンであることを確認した。しかし、それが佛典目録類に見えないこと、あるいは、ある時代の塞外地の産物と、中國國內の明初の産物がどのように結びつくのか等の疑問は依然として残ったままであつた。

ところが筆者は最近、北京にある中國國家圖書館（舊の北京圖書館）で印刷本の調査にあたられた梶浦晋氏に

より、元版の『佛説小涅槃經』の存在を知った。さらに二〇〇五年の春に、梶浦氏および中國國家圖書館・善本特藏部の副研究館員である李際寧氏の盡力で、件の印刷本を閲覧する機會を得た。

この印刷本には「長樂鄭振鐸西諦藏書」の藏書印が押しであり、文學史家の鄭振鐸（一八九八〜一九五八）の舊藏であったことが分かる。折本形式で、冒頭部分が欠け、六葉である。一葉は五行、一行は十七字である。縦は二十一・八cm、横は七・九cm、天界・地界の幅はそれぞれ一・三cmと〇・八cm、罫線はない。これは紙背に印刷されたもので、表はやはり元版の『摩訶般若波羅蜜多心經』（圖書館番號・一六〇七三）である。そこにはページ數を示す「二十五」という數字も刷られている。『心經』や『佛説小涅槃經』を初めとする、比較的短い經がまとめて印刷されていたことを示そう。移寫すれば下記のようなになる。葉と葉の間には一行を設け、句讀點を添えた。

母令知。爾時摩耶夫人在忉利天上、受諸快

樂。忽於昨夜子時、得六種惡夢。一者、夢見有

大猛火、燒我心肝、兩乳流出。二者、夢見須弥

山崩。三者、夢見海水枯竭。四者、夢見磨竭大

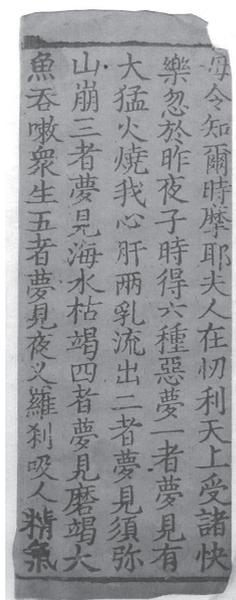
魚吞噉衆生。五者、夢見夜叉羅刹、吸人精氣。

六者、夢見一切衆生、惆悵奔走、如蜂失王。說

夢未訖、乃見報人優波離、從空而來。爾時摩

耶夫人問言、尊者尊者、因何形容憔悴。面無

精光、唇口乾燥、全無威德、不比尋常。爾時優



中國國家圖書館所藏の『佛説小涅槃經』

波離哽噎報言、佛母佛母、三界大師、忽於昨

夜子時、入般涅槃。金棺銀槨、殯殮已訖。故遣

弟子、報母令知。爾時摩耶夫人聞說此語、悶

絕躄地、猶如死人。諸天彩女冷水灑面。良久

乃甦、即將徒衆、鬘鬘雲飛。至雙林所、唯見大

衣僧伽梨、疊在棺邊、鉢盂錫杖、空掛樹上。爾

時摩耶夫人作是念言。我子在時、持用此物、

教化衆生。今者此物並皆無用去也。爾時摩

耶夫人披頭散髮、搥膺大叫、遶棺三匝。喚言、

如來如來、吾是汝母、汝是吾子。今既捨吾、入

般涅槃、因何不爲母說四句偈言。爾時如來

在金棺中、聞母喚聲、從棺踊出、却坐般若臺

中。去地高七多羅樹、手執優鉢羅華、爲母說

法。一切恩愛、皆有離別。一切山岩、皆有崩穴。

一切樹木、皆有摧折。一切江河、皆有枯竭。一

切萬物、皆有破壞。母子恩情、今日離別、唯有

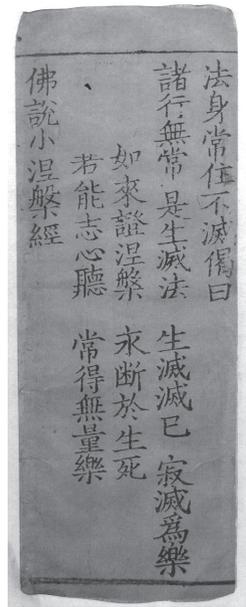
法身、常住不滅。偈曰、

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂

如來證涅槃 永斷於生死

若能志心聽 常得無量樂

佛說小涅槃經



この版本は首題と冒頭の部分を缺いている。第三章で紹介した国立バイエルン図書館所蔵の寫本『佛說小涅槃經』は逆に末尾と尾題を缺いているので、兩者は重ならない部分もあるが、詳細に検討すれば、ほとんど一致することが分かる。一致しないのは異體字、音通互用の文字の異同が大半である。従つてこのテキストは、国立バイエルン図書館所蔵の寫本『佛說小涅槃經』と同じく、四つに分類された『佛母經』（およびロシア藏三、四〇二〇四七）のどの系統とも重ならない、『佛母經』のまた別のバージョンである。元あるいは明初のものかとも言われている非常によく似た版本の出現は、バイエルンの寫本『佛說小涅槃經』を明初のものとして断定し得る新たな資料の發見と言えよう。

結語 『佛母經』の傳承

『佛母經』は、佛典目録に見えない疑經であるが、敦煌やトルファンで多くの寫本として發見されている。第一章ではこの經典の構成や内容について述べ、方廣錫・李際寧による寫本の翻刻と四分類を紹介した上で、これ

が疑經である點に解説を加えた。第二章では、前記の翻刻に含まれない敦煌及びトルファンの寫本を移寫した。また第三章では、全く來歴を異にし、長年同定されなまになつていた明初とされる寫本『佛說小涅槃經』が、やはり『佛母經』の一バージョンであることを確認した。さらに第四章では、北京の國家圖書館所藏の元刻本『佛說小涅槃經』を紹介し、これとの類似によつて、バイエルン所藏の寫本が明初のものであることを傍證した。以上のことから、『佛母經』は、八、九世紀の唐の時代から元の時代を経て十五世紀前半の明初まで、塞外のみならず廣く中國に流布していたことが判明したのである。

最後に偽經『佛母經』はどのような形で傳承されてきたのかについて述べておこう。榮新江は次のように述べて、歸義軍時代の敦煌の民衆佛教の特色の一つとして、疑經の流行を指摘している。彼は池田温氏の著作に依つて、九世紀末から十一世紀初めの歸義軍時代に納まる紀年のある四十八の寫經の「經名」「年代」「書手或供養人」「疑偽經」「編號」「池田編號」を整理した表を作り、短い眞經と疑經の流行に注目する。その部分を譯してみれば以下のようになる。

敦煌庶民の佛教の發展經過には多くの表現形式が存在する。ここではただ疑經の流行を例として擧げる。以下、先ず、ほとんど全面的に池田温編『古代寫本識語集録』により資料を収集し、その中で曹氏時代と確定できる佛教文獻の一覽表を下のように擧げ(次ページを見よ)、そこで検討を加えよう。

下の表から一目で見取れることは、疑經の流行が壓倒的な趨勢となり、僧俗官吏を問わず、ひとしくこれを迷信したことである。所謂眞經に屬するものは、また何らかの民間通俗信仰と密接に關係する『金剛經』『般若心經』『觀世音經』(つまり『妙法蓮華經普門品』)『阿彌陀經』等、數種だけである。⁽²⁸⁾

榮新江が掲げた紀年のある四十八の寫經のうち、疑經は三十、つまり約三分の二を占めている。榮新江は疑經についてはこれ以上述べないが、彼の示した表からは、小論と關わるもう一つの事実が讀みとれる。それはこれ

らの疑經が連寫されている點である。ペリオ二三七四は、九五九年の禪師惠光による『佛說延壽命經』『續命經』『天請問經』の連寫であるし、スタイン五六四六は、疑經の『摩利支天陀羅尼經』『佛說齋法清淨經』そして眞經の『金剛般若波羅蜜經』が、九六九年に大乘賢者兼當學禪録の何江通によつて連寫されたものである。また天津市藝術博物館藏四五三二では『佛說無常經』『佛說水月光觀音菩薩經』『佛說呪魅經』『佛說天請問經』が、北京圖書館藏「岡四四」では『佛說閻羅王授記經』『佛說護諸童子經』と眞經の『般若波羅蜜多心經』が連寫されている。さらにペリオ二〇五五の『佛說孟蘭盆經』『佛說佛母經』『佛說善惡因果經』は、九五八年から翌年にかけて翟奉達（八八三〜九六一？）が連寫したものである。最後の翟奉達の連寫にはそれぞれの經に奥書が付けられている。その一つ、ペリオ二〇五五c「佛說善惡因果經」はこれらの經がどのように用いられたかを傳えている。

弟子朝議郎檢校尚書工部員外郎翟奉達、亡過妻の馬氏の追福の爲に、齋毎に經一卷を寫す。標題は是の如し。第一七齋に无常經一卷を寫す。第二七齋に水月觀音經一卷を寫す。第三七齋に呪魅經一卷を寫す。第四七齋に天請問經一卷を寫す。第五七齋に閻羅經一卷を寫す。第六七齋に護諸童子經一卷を寫す。第七七齋に多心經一卷を寫す。百日齋に孟蘭盆經一卷を寫す。一年齋に佛母經一卷を寫す。三年齋に善惡因果經一卷を寫す。右件の寫經せし功德は過往馬氏の追福の爲なり。奉じて龍天八部、救苦觀世音菩薩、地藏菩薩、四大天王、八大金剛に請いて以て證盟を作し、一一、福田を領受し、樂處に往生し、善知識に遇い、一心に供養せんことを。

七七齋、百日齋、一年齋、および三年齋の合計十回の法事に用いられる經は上記のごとくであるが、それらは『般若波羅蜜多心經』を除いてすべては疑經である。翟奉達の場合、『佛母經』は一周忌に寫經され、奥書には

亡過家母の爲に此の經一卷を寫し、年周に追福せんとす。願わくは影を好處に託し、三塗の(哉)災に落つる勿く、仏弟子馬子、一心に供養せんことを。

とその筆寫の意圖が述べられているが、『佛母經』と一周忌の特別の關係には言及がない。従つて、この資料から小論との關係で言えることは、これらの疑經類が民衆に非常に近いところに存在した點と、連寫されたことの兩點である。つまり元版『摩訶般若波羅蜜多心經』の裏に『佛說小涅槃經』が刷られ、そのページ數が小經典にも関わらず、「二十五」と大きな數字であつたことは、大半は疑經であろう小佛典が、版木の時代になつても連寫の傳統を繼承して刷られていたことを示す。筆寫の時代から印刷の時代に入つてもこのような形式が間斷なく繼續したことは、『佛母經』（『佛說小涅槃經』）を初めとする疑經の受容が民衆の底辺に深く浸透していたことを示している。そしてそれらの經は、余りにもポピュラーであつたために、逆に目録類に掬い上げられることもなかつたのだと想像されるのである。

注

- (1) 以下、スタイン・コレクションはスタイン、S、斯、ペリオ・コレクションはペリオ、P、伯で表示した。
- (2) 一九九五年、宗教文化出版社。
- (3) 一九九八年、上海辭書出版社。
- (4) この解説は方廣鋳が担当した。頁七三二。
- (5) 『藝文類聚』卷三、歲時上「夏」に引く『淮南子』。
- (6) 『李太白文集』卷一「古風」五十九首の一。
- (7) 一九九九年、上海古籍出版社。
- (8) 伯四七九九は「渾礎」を「渾捶」に作る。

- (9) 伯四七九九は「在日」を「再日」に作る。
- (10) 伯四七九九は「攷」を「汶」に作る。
- (11) 「有」の一字、諸本により補う。
- (12) 「權折」以下、末尾まで字體は別。
- (13) 「遶」、諸本は「繞」に作る。
- (14) 「迎」、諸本は「匝」に作る。
- (15) 「踰」、諸本は「逾」に作る。
- (16) 「摩」、諸本は「磨」に作る。
- (17) 「轉」、北京藏「羽」十五はナシ。
- (18) 「佛母經一卷」、北京藏「羽」十五は「佛母經」に作る。
- (19) 「跋」、諸本は「拔」に作る。
- (20) 「已」、諸本は「以」に作る。
- (21) 「搥」、諸本は「捶」に作る。
- (22) 「綵」、諸本は「彩」に作る。
- (23) Thomas Thilo, *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente*, Band 2, p. 87, Fig. 76 (Berlin, 1985).
- (24) 上記の目録の説明では敦煌からのものとなれている。
- (25) 拙著『ドイツ將來のトルファン漢語文書』(二〇〇二年、京都大學學術出版會) 九九〜一〇七頁参照。
- (26) Einige Drucke u. Hss. aus d. frühen Ming-Zeit, in *Oriens Extremus* 19, p. 55-64, 1972.
- (27) 「生」は小字。脱字したのを補う。
- (28) 『歸義軍史研究』、上海古籍出版社、一九九六年、頁二七六。

追記

A上で検討した二十六種以外にさらに四つの『佛母經』断片を確認出来たので、記しておく。

イ、大谷文書「五〇六四」表（「占書断片」とされる）。大きさ十一・〇cm×七・八cm、『大谷文書集成』参、二〇〇三年、法藏館。圖版四十二。これは李際寧分類の「四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人説偈品經」のペリオ四七九九のタイプである。移寫すれば、

（吾與汝不相見也。即使優婆離往藝初利天上、

告）吾母（知。舉身疼痛、不可思議。願母早來、禮敬

三寶。尔時佛母於其中夜作）六德惡夢。一者夢見

々

五月降霜四者

（須彌山崩、二者夢見四海枯）竭、三者夢見大火來

（四者夢見寶幢摧折、幡花崩倒、五者夢

見大火來燒我身、六者夢見兩乳自然）流出。

尔時佛母說夢（未訖、正見優婆離從空中而來。）

ロ、旅順博物館藏（大谷探檢隊將來のトルファン文書）LM20_1498_02_03

三行。大きさは十三・二cm×五・五cm。（旅順博物館・龍谷大學共編『旅順博物館藏 トルファン出土漢文佛典選影』、

二〇〇六年、法藏館。寫眞は一八七頁）。移寫すれば、

噫噫告言佛母

法身入般涅槃故使我

已嗚呼大哭舉手捶胸

四分類と完全に一致する寫本ではない。しいて求めるのであれば、「四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經」に近い。

ハ、旅順博物館藏（大谷探檢隊將來のトルファン文書）LM20_1498_06_01

四行。大きさは十一・二cm×七・〇cm。（旅順博物館・龍谷大學共編『旅順博物館藏 トルファン出土漢文佛典選影』

二〇〇六年、法藏館。寫眞は一八七頁）。移寫すれば、

佛說佛母經

尔時如來欲般涅

今欲般涅槃不見

等

吾與汝不相見也

〔四、大般涅槃經佛爲摩耶夫人說偈品經〕の戊本（スタイン二〇八四）に近い。

二、ベルリン Ch3215 は玄奘『般若波羅蜜多心經』（T8:848c1-20）に、もう一枚「佛說佛母經」の部分が付着する。「佛說佛母經／尔時如來在……尸……日臨般涅槃倚卧雙……」、『漢語佛典斷片目錄』、四十八頁）。因みに『般若波羅蜜多心經』は七世紀なかごろから八世紀の寫本と推定されている。

B 佛母、すなわち摩耶について、ベルナル・フランク（1927-1996, Bernard Frank）は、邦譯『日本佛教曼荼羅』（*Amour, colère, couleur. Essais sur le bouddhisme au Japon*, 2000, コレージュ・ド・フランス日本學高等研究所・佛蘭久淳子譯、二〇〇二年、藤原書店）の中でふれている（第一部、第四章 麻耶—佛陀の母 一三五—一五三頁）。彼は聖母マリヤに當たるのは東アジアではハーリーティー（訶梨帝 Haliṭi）という女鬼神（鬼子母神）と觀音菩薩（子安觀音、子育觀音）であると指摘する（一四七頁以下）。

